

# 「教育サービス面における社会貢献」評価報告書

(平成12年度着手 全学テーマ別評価)

大 分 医 科 大 学

平成14年3月

大学評価・学位授与機構



## 大学評価・学位授与機構が行う大学評価

### 大学評価・学位授与機構が行う大学評価について

#### 1 評価の目的

大学評価・学位授与機構（以下「機構」）が実施する評価は、大学及び大学共同利用機関（以下「大学等」）が競争的環境の中で個性が輝く機関として一層発展するよう、大学等の教育研究活動等の状況や成果を多面的に評価することにより、その教育研究活動等の改善に役立てるとともに、評価結果を社会に公表することにより、公共的機関としての大学等の諸活動について、広く国民の理解と支持が得られるよう支援・促進していくことを目的としている。

#### 2 評価の区分

機構の実施する評価は、平成 14 年度中の着手までを段階的実施( 試行 )期間としており、今回報告する平成 12 年度着手分については、以下の 3 区分で、記載のテーマ及び分野で実施した。

全学テーマ別評価（「教育サービス面における社会貢献」）

分野別教育評価（「理学系」、「医学系（医学）」）

分野別研究評価（「理学系」、「医学系（医学）」）

#### 3 目的及び目標に即した評価

機構の実施する評価は、大学等の個性や特色が十二分に発揮できるよう、当該大学等の設定した目的及び目標に即して行うことを基本原則としている。そのため、大学等の設置の趣旨、歴史や伝統、人的・物的条件、地理的条件、将来計画などを考慮して、明確かつ具体的な目的及び目標が設定されることを前提とした。

### 全学テーマ別評価「教育サービス面における社会貢献」について

#### 1 評価の対象

本テーマでは、大学等が行っている教育面での社会貢献活動のうち、正規の課程に在籍する学生以外の者に対する教育活動及び学習機会の提供について、全機関的組織で行われている活動及び全機関的な方針の下に学部やその他の部局で行われている活動を対象とした。

対象機関は、設置者（文部科学省）から要請のあった、国立大学（政策研究大学院大学及び短期大学を除く 98 大学）及び大学共同利用機関（総合地球環境学研究所を除く 14 機関）とした。

各大学等における本テーマに関する活動の「とらえ方」、「目的及び目標」及び「具体的な取組の現状」については、「教育サービス面における社会貢献に関する目的及び目標」に掲げている。

#### 2 評価の内容・方法

評価は、大学等の現在の活動状況について、過去 5 年間の状況の分析を通じて、次の 3 項目の項目別評価によ

り実施した。

- 1) 目的及び目標を達成するための取組
- 2) 目的及び目標の達成状況
- 3) 改善のためのシステム

#### 3 評価のプロセス

大学等においては、機構の示す要項に基づき自己評価を行い、自己評価書（根拠となる資料・データを含む。）を機構に提出した。

機構においては、専門委員会の下に、専門委員会委員及び評価員による評価チームを編成し、自己評価書の書面調査及びヒアリングの結果を踏まえて評価を行い、その結果を専門委員会に取りまとめた上、大学評価委員会で評価結果を決定した。

機構は、評価結果に対する意見の申立ての機会を設け、申立てがあった大学等について、大学評価委員会において最終的な評価結果を確定した。

#### 4 本報告書の内容

「対象機関の現況」及び「教育サービス面における社会貢献に関する目的及び目標」は、当該大学等から提出された自己評価書から転載している。

「評価結果」は、評価項目ごとに、特記すべき点を「特に優れた点及び改善点等」として記述している。

また、「貢献（達成又は機能）の状況（水準）」として、以下の 4 種類の「水準を分かりやすく示す記述」を用いている。

- ・十分に貢献（達成又は機能）している。
- ・おおむね貢献（達成又は機能）しているが、改善の余地もある。
- ・ある程度貢献（達成又は機能）しているが、改善の必要がある。
- ・貢献しておらず（達成又は整備が不十分であり）、大幅な改善の必要がある。

なお、これらの水準は、当該大学等の設定した目的及び目標に対するものであり、相対比較することは意味を持たない。

また、総合的評価については、各評価項目を通じた事柄や全体を見たときに指摘できる事柄について評価を行うこととしていたが、この評価に該当する事柄が得られなかったため、総合的評価としての記述は行わないこととした。

「評価結果の概要」は、評価結果を要約して示している。

「意見の申立て及びその対応」は、評価結果に対する意見の申立てがあった大学等について、その内容とそれへの対応を示している。

#### 5 本報告書の公表

本報告書は、大学等及びその設置者に提供するとともに、広く社会に公表している。

## 対象機関の現況

大分の医学・医療の歴史は非常に古く、1557年、ポルトガルの宣教医ルイス・アルメイダが豊後の領主、大友宗麟の保護のもとに開いた府内病院から始まる。この府内病院は、我が国で最初の洋式の病院であった。

この大分（大分郡挾間町）の地に昭和51年10月大分医科大学が創設され、昭和53年4月、第1回の入学生を受け入れた。国策として「一県一医大」の構想の基に、まず医学科が開設され、平成6年には看護学科が開設された。また、昭和59年4月に大学院医学研究科（博士課程）が設置され、平成10年4月には大学院医学系研究科看護学専攻（修士課程）が設置された。

本学は、大分県の中央部に位置し、車でJR大分駅から30分、大分空港から約1時間、大分自動車道の大分インターから10分の所に位置し、大分市と隣接している。本学は西北に奥別府の鶴見岳と由布岳、北に高崎山を望む高台にあり、25万平方メートルのキャンパスは、このすばらしい眺望に恵まれ教育・研究・診療に最適な環境に在る。

平成12年度の学生数、教員数等は、医学科は収容定員が560名で在籍学生数は589名である。看護学科は、収容定員が240名で在籍学生数は264名である。医学系研究科博士課程は、収容定員120名、在籍学生数は138名である。修士課程は、収容定員32名、在籍学生数は24名である。本学の教員数（現員）の総数は290名である。

こうして本学は、医学・医療の両輪ともいえる、医学科と看護学科からなり、両学科に大学院を備え、全人的医療が行える人材を養成する医系単科大学として発展してきた。

医学科では6年間の一貫教育が行われ、最初の1年半は一般教養を中心にカリキュラムが組まれ、豊かな教養を身に付け、人間性に溢れた思考力の修練に努めている。また、この期間には、医療人としての自覚や患者の立場に立った全人的ケアの重要性について認識させるため、早期体験学習として学内外の医療機関等で実習を行っている。

なお、平成12年度よりカリキュラムを全面的に改定し、2年次後学期からの専門教育で臓器別・機能別統合カリキュラムを導入し、チュートリアル教育を採用し、自己問題提起・解決型の教育を目指している。また、臨床実習を充実させるため診療参加型臨床実習を採用している。

看護学科では一般教育に加えて、基礎看護学、臨床看護学、地域・老年看護学を学び、一般教育では医学科と同様に豊かな教養を身に付け、人間性に溢れた思考力の修練に努めている。基礎看護学では人間の構造、生理、病気の原因や成り立ち、保健医療を学び、臨床及び地域・老年看護学では講義、演習さらには附属病院での実習

及び臨地実習を通じて実践的な看護技術を学習している。

附属病院は、昭和56年10月に開院し、本年20周年を迎える。この間、医療や医学の発展に貢献すべく新しい診断、治療法の開発や難治疾患説明等に取り組みながら大分県の中核的医療機関として、県下の医療の向上を果たすなど地域医療に大きく貢献している。

さらに、21世紀の国民のニーズに応えるべく、より良い医療の提供と医学の進歩に伴う高度医療技術の開発を推進するため、前例にとらわれることなく、病院改革5ヵ年計画書を基に将来を見据えた病院の改革を行っている。また、これに関連して病院再開発整備を計画し、21世紀にふさわしい病院像を模索している。

国際交流・協力に関しては、ドミニカ共和国医学教育プロジェクトによる技術協力や教育を実施し、中華人民共和国の河北医科大学と中国人民解放軍軍医進修学院、サントドミンゴ自治大学（ドミニカ共和国）、ルイス・エドワルド・アイバル病院（ドミニカ共和国）と交流協定を結び、さらにサン・ラザロ病院（フィリピン）とも交流協定を結ぶこととしており、外国人留学生、研究者等の受入をはかり、国際社会への貢献を果たしていくこととしている。

社会の大学に対する期待は、ますます高まっており、これからも高い倫理観と豊かな教養を身に付けた臨床医及び看護職者並びに生命科学研究者の育成等を心がけ、教育、研究、医療の充実に取り組むこととしている。

## 教育サービス面における社会貢献に関する目的及び目標

### 1. 教育サービス面における社会貢献に関する考え方

かつての大学においては、人材育成教育が社会に対する最大の貢献ととらえられ、大学教員が直接、社会貢献をすることは副次的なもののみなされてきた。すなわち、大学は社会から超越した存在でよかったのである。しかし、急速に変化する現代社会においては、もはや大学は社会から隔離した存在ではありえない。社会変化の影響はすでに大学にも押し寄せており、いわゆる伝統的な教授法では授業が成り立たない状況が生まれている。すなわち、大学人は社会の変化、社会の要請を敏感に受け止め、社会に公開された存在、社会に対して積極的に働きかける存在となることを要請されているのである。

現代社会が抱える諸問題は、物質的豊かさ、科学技術の驚異的発達に対する、人々のある種のリアクションと考えてよい。戦後の高度経済成長期を経て、さらに、バブル期にわが国が達成した、かつてないほどの物質的豊かさは、人々の精神構造に未曾有の変化をもたらしたのである。たとえば、フリーターの激増にみられる職業観の変化、ひきこもりや凶悪少年犯罪にみられる人間関係の崩壊などは、それが顕在化した結果ともいえる。さらに、コンピュータの発達は現実世界と仮想現実との境界を曖昧にし、生命科学の急速な進歩は遺伝子を操作する技術を生み出して、自然観、生命観に大きな混乱をもたらしている。また、平成 27 (2015) 年には、わが国の総人口の 4 人に 1 人が 65 歳以上の高齢者となるものと推定されている。このような人口構造の急激な高齢化は、世代間の知識や認識のありように大きなギャップを生じさせている。そして、世代の分断化がおき、人々の相互理解ははなはだ困難になっている。

このように、21 世紀初頭の現在、人々は将来に対する漠然とした不安、科学技術に対する不信感を抱いており、新しい科学技術に対する正しい知識や対処法、新たな倫理観の構築を求めている。そこで、大学の社会貢献の意義は、このような混迷したなかにあって、正しい知識と現状認識を社会人に提供する、開かれた教育サービスの場となることにある。

大学には、さまざまな知識や学術情報が集中し、蓄積されている。そのため、大学がその情報を多様なメディアを通して発信すること、また、大学に行けば求める知識や情報にアクセスできるなど、社会に開かれた大学は、学術情報のセンターとして貢献しうる。それは、単に社会に向けて教育サービスを提供するという一方向的なものではない。大学が開かれることによって、さまざまな

フィールドと大学が有機的にかかわりあい、そこから大学教員が新たな研究テーマを得たり、多様な組織との共同研究を実施する可能性も拓かれるなど、相互触発的な関係が生まれるのである。また、このような研究活動の活性化や、社会の多様な人々に対しての教育サービス提供といった経験は、教員の学内での教育活動の活性化にもつながるものと捉えられている。

本学は医科大学という性質上、一般社会人に対する健康教育や、医療従事者への教育・研修における貢献が中心となる。ただし、本学には自然科学、人間コミュニケーション科学からなる一般教育部門を有していることから、医学を専門としない教員による医療・医学の相対化・客体化が可能である。すなわち、医学が高度に専門分野化していくなか、医療従事者の視野狭窄を防ぎ、生活者としての患者を全人的に理解するための、多角的・学際的な視点を踏まえた医学領域における社会貢献が含まれるのである。そこに、大分医科大学の教育サービス面での特色がみられる。

現在、大分医科大学では、教育サービス面における社会貢献の具体的な活動として、社会人教育、公開講座、大学開放事業、図書館公開、医学資料展示などを行っている。その目的・目標や内容については、次節に述べている通りである。

### 2. 教育サービス面における社会貢献に関する目的及び目標

#### (1) 目的

##### (ア) 医療従事者のレベル向上

現場で働く医師、看護婦(士)、その他コメディカルなど医療従事者には、常に医学の発展を吸収して医療に生かすことが望まれている反面、医学の進歩は極めて急速で、これを理解して日々の臨床業務に生かすことは容易でない。県内唯一の医学部である本学においては、医学教育機関の核として、医療従事者の生涯学習、リカレント教育の場として、医療従事者のレベル向上に貢献することが第一の目標である。さらに、医学・看護学系大学院を有し、臨床能力だけでなく医療従事者の研究面にも多様な教育サービスを提供することが求められる。とくに看護学系大学院はいまだ少数であることから、ますますその責務は大である。

##### (イ) 社会人に対する医学・看護学・医療等の知識の普及 遺伝子治療をはじめ、クローン人間の誕生を目指す動

きも出現するなど、近年、生命倫理・医療倫理に関する論議がマスコミをにぎわしている。インフォームドコンセントが強調されながらも、一方でこのような医学・医療の急速な発展は、一般社会人にとってはなはだ難解なものである。そのため、医学者・医療従事者の暴走を懸念して、医学への不信・不安感も社会に急速に広がっている。

そこで、一般社会人に医学・看護学の進歩を分かりやすく解説し、理解を求めていくことも医学部教員の役割となる。これは単に教員から一般社会人への一方的な講義であってはならず、むしろ社会人からの意見に耳を傾けることによって、医学・看護学・医療が独善に陥ることから救うことになることと期待される。

さらに、生活習慣病など疾病そのものについての予防・治療法の知識の普及はもちろんのこと、たとえば学校や職場におけるメンタルヘルス、ストレス対処法、デス・エデュケーション（死への準備教育）など、地域に密着した幅広い健康教育を展開することも、医科大学という特質を生かした社会貢献である。

#### （ウ）中・高校生への大学紹介、勉学動機づけ

中・高校生には医療従事者を目指す有能な人材が含まれている。したがって職業教育の一環として、本学医学部の概要や卒後の進路などを紹介し、早期に動機づけを行うことは、大学として次代の医療人を育成するうえで重要である。現在、医療職を志す高校生は増加していると言われるが、医学・看護学・医療の実態を正しく認識してもらい、有為の人材に医学・看護学・医療を、さらには大分医科大学を志望してもらうためにも、不可欠な活動である。

#### （エ）図書資料の公開

医学部では主に医学に関する多数の図書や学術誌を有している。これらのなかには学外の図書館などには収蔵されていない、貴重な資料も少なくない。しかし、このような資料は学外の人々には利用しにくいのが現状である。健康教育や患者自身のセルフケアが重視されている現在、研究者のみならず一般社会人にも広く、医学・看護学・医療に関する資料を公開することも大学の責務である。

#### （オ）医学史資料の収集と公開

大分県はわが国で最も早く（1557年）西洋医学の病院が開設されたところである（ルイス・アルメイダによって現在の大大分に開設）。また、鎖国時代にも蘭学が学ばれており、日本で最初の解剖書（解体新書）の作成に関与した前野良沢や心臓刺激伝導系（田原結節）を発見した田原淳の出身地としても知られている。このため医学史的に重要な資料が存在する。それらの収集資料を一般に公開することも、単に医学にとどまらず、地域の歴史・文化への関心の喚起という意味で、社会貢献と考えられる。

#### （2）目標

##### （ア）医療従事者のレベル向上のための教育

医療従事者のレベル向上のためには、専門的な知識の修得、研究能力の向上が必要である。本学では、研究テーマをもって研究しようとする熱心な医師を関連講座の研究生として多数受け入れて研究指導を行っている。

##### （イ）公開講座

大学が主催する公開講座および学外団体等が開催する公演会や講習会に本学教員が講師として協力し、社会人に対する医学・看護学等の知識の普及に努める。本年度も「こころの病とこころの健康」というテーマで公開講座を開催する予定であるが、これは医学科、看護学科、一般教育それぞれの関連講座が協力して、全学体制で行うものである。

##### （ウ）大学開放事業

中・高校生に対し、オープンカレッジを開催して大分医科大学を紹介し、「やさしい医学・看護学」等の講義実習を行って、将来の医療従事者を目指すような動機づけを行う。

現在、高校生及び関係者を対象とした大学説明・見学会を行っているが、次年度は新たに大学等地域開放特別事業に取り組むこととした。地域の中学生とその父母を対象に「ワーミー・ワールドを体験しよう」という名称での開放事業を予定している。

##### （エ）図書館公開

一般社会人にも利用しやすいよう、図書館の入館・閲覧システムを検討し、地域へ広報をはかる。研究機関からの閲覧希望者はもちろん、一般社会人が容易にアクセスできるような図書館の整備を目指す。とくに健康教育の観点から、附属病院との連携もふまえて、図書館を健康教育やセルフケアのための情報リソースとする。

##### （オ）医学資料展示

常設の展示室などを整備のうえ一般公開し、医学史への関心を喚起する。これまで大分医科大学が収集に努めている医学史資料のうち、旧杵築藩の御典医であった佐野家から恵与された資料を「佐野家古文書」として2度にわたって展示会を開いており、常設展示への端緒としてこのような活動の充実を図る。

---

### 3. 教育サービス面における社会貢献に関する取組の現状

---

21 世紀における大学は、科学技術の進歩のみを目的とした研究活動や、学生に限定した人材育成教育だけを行う、社会から隔絶した存在ではありえなくなっている。したがって、科学技術の急激な進歩がもたらす負の側面を補償し、分断され異なる価値観を有する人々の相互理解を促進するためにも、教育サービスによる社会貢献は、現代社会における大学にとって不可欠の責務である、と大分医科大学ではとらえている。

今日、本学が地域社会に開かれた大学となり、学術情報のセンター、さらには地域への教育サービス提供のコア機関として機能することが強く求められる。とくに本学は大分県内唯一の医学部(医学科・看護学科)であり、大学院博士課程(医学系)及び修士課程(看護学系)を有している。このような特質・特徴を活かして、一般社会人及び医療従事者に向けた、医学・看護学・医療に関する教育サービス面における社会貢献を行うことが本学の目標・目的であり、また独自性を有する教育サービスでもある。

そこで、医療従事者のレベル向上、医学・看護学・医療等の知識の普及や健康教育に代表される一般市民への教育・啓発活動として、本学ではさまざまな取組を行ってきた。その取組の現状を簡潔に要約すると、次のとおりである。

#### (1) 医療従事者のレベル向上に向けての活動

本学では、臨床現場の医師、看護婦(士)及びコメディカル職への大学院教育、聴講生・研究生の積極的な受け入れと研究指導を行っている。また、医療従事者を対象とする学外団体の研修会への講師派遣要請などにも、積極的に応じている。

#### (2) 社会人に対する医学・看護学・医療等の知識普及を目的とした活動

医療・健康問題をテーマとした公開講座を開催している。さらに、健康教育のための学外団体の研修会にも積極的に協力している。

#### (3) 中・高校生への大学紹介、勉学動機づけのための大学開放事業

高等学校関係者及び生徒を対象とした大学説明会及び施設案内を行っている。また、平成 13 年度は大学等地域開放特別事業の実施を予定している。

#### (4) 図書資料の公開、図書館公開に関する活動

大分県内唯一の医学部附属図書館として、学外者の図書館利用を積極的に受け入れ、図書資料の閲覧、複写サービスを行っている。

#### (5) 医学史資料の収集と公開に関する活動

大分県内を中心とした医学史資料の収集及び展示会の開催などを行い、医学のみならず、地域の歴史・文化への関心を喚起する契機としている。

## 評価結果

### 1. 目的及び目標を達成するための取組

大分医科大学においては、「教育サービス面における社会貢献」に関する取組として、公開講座、大学開放事業、図書館の開放、医学資料展示、聴講生・研究生の受入れ、研修会への講師派遣等の協力、大学説明会及び施設案内などが行われている。

ここでは、これらの取組を「目的及び目標を達成するための取組」として評価し、特記すべき点を「特に優れた点及び改善点等」として示し、目的及び目標の達成への貢献の程度を「貢献の状況（水準）」として示している。

#### 特に優れた点及び改善点等

医療従事者のレベル向上のための活動として、臨床セミナーの開催や、研究生・受託実習生・病院研修生の受入れを積極的に行っており、その中でも、臨床セミナーは、「がん告知の現状」、「結核 - いま何故問題なのか - 」、「医療事故紛争を防止するために - 今なぜメディカルリスクマネジメントが必要なのか - 」など、医学・健康に関する時々話題をテーマとしている点が優れている。

公開講座は、社会人に対する医学・看護学・医療等の知識の普及を目的として、「健康に生きるために」、「生活環境と病気とのかかわり」、「老年者の病気と介護」、「これからの医療と看護 - 自分で守る健康 - 」など、医学・健康に関する時々トピック的なテーマを取り上げられており、それぞれのテーマに対して複数の講義題目を設定し、関係科目の教官が協力して全学体制で実施されている点が優れている。

附属図書館においては、開館時間を平日は9時から20時、土・日曜日、祝日は10時から17時とするなど、学外の利用者に積極的に公開している点は優れているが、目標にある附属病院との連携も踏まえた附属図書館の健康教育やセルフケアのための情報リソースとする取組が行われておらず、改善を要する。

附属図書館医学史資料室においては、旧杵築藩の御殿医であった佐野家から恵与された資料を「佐野家古文書」として、大分県内を中心に平成11年度、12年度の2度わたって展示会を開催している。特に平成11年度には、公開展示会とともに講演会も開催している。これらの取組は、医学のみならず、地域の歴史・文化への関心を喚起する優れた取組である。

#### 貢献の状況（水準）

取組は目的及び目標の達成におおむね貢献しているが、改善の余地もある。



---

## 2. 目的及び目標の達成状況

---

ここでは、「1. 目的及び目標を達成するための取組」の冒頭に掲げた取組の達成状況を評価し、特記すべき点を「特に優れた点及び改善点等」として示し、目的及び目標の達成状況の程度を「達成の状況（水準）」として示している。

### 特に優れた点及び改善点等

公開講座について、過去5年間の受講者の状況を見ると、受講者数が定員に満たないテーマが若干見受けられるものの、受講修了者率（受講者のうち、講義出席数が5回以上の者の割合）は、76%を超え、平成12年度に受講者に対して実施したアンケート調査によると、講座内容について「分かりやすかった」、「適当であった」との回答が95%であり、講座への満足度が高く優れている。

しかし、一部では、「専門的な内容で分からなかった」との回答もあり、改善の余地がある。

附属図書館の学外の入館者数は、毎年度600人から700人前後であり、成果を上げている。

しかし、その大半は他大学の学生及び他機関の医学・看護学・医療等の研究者等であり、一般市民の入館は1割にも満たない状況については、改善の余地もある。

「佐野家古文書」の展示会の入場者数は、平成11年度が130人であったのに対し、平成12年度は72人と減少している点においては改善の余地もあるが、アンケート調査からみると入館者の満足度は高く、成果を上げている。

研究生は、毎年度200人前後の受入れがあり、成果を上げている。

### 達成の状況（水準）

目的及び目標がある程度達成されているが、改善の必要がある。

---

## 3. 改善のためのシステム

---

ここでは、当該大学の「教育サービス面における社会貢献」に関する改善に向けた取組を、「改善のためのシステム」として評価し、特記すべき点を「特に優れた点及び改善点等」として示し、システムの機能の程度を「機能の状況（水準）」として示している。

### 特に優れた点及び改善点等

公開講座や医学史資料の展示においては、受講者等を対象にアンケート調査を行い、意見や問題点などを把握し改善に結びつけている点は優れているが、取組全般においては、受講者等以外の幅広い社会のニーズが把握されておらず、この点において改善の余地もある。

各活動については、自己点検・評価を行い、問題点を把握しているが、外部からの意見を取り入れるための取組として、外部評価などが行われておらず、改善の余地もある。

### 機能の状況（水準）

改善のためのシステムがある程度機能しているが、改善の必要がある。

## 評価結果の概要

### 1. 目的及び目標を達成するための取組

#### 特に優れた点及び改善点等

医療従事者のレベル向上のための活動として、臨床セミナーや、研究生・受託実習生・病院研修生の受入れを積極的に行っており、その中でも臨床セミナーは、医学・健康に関する時々の話題をテーマとしている点が優れている。

公開講座は、医療、健康に関する時々のトピック的なテーマを取り上げ、全学体制で実施されている点が優れている。

附属図書館においては、学外の利用者に積極的に公開している点は優れているが、目標にある附属病院との連携を踏まえた健康教育やセルフケアのための情報リソースとする取組が行われておらず、改善を要する。

附属図書館医学史資料室における大分県内を中心とした医学史資料の展示は、医学のみならず、地域の歴史・文化への関心を喚起する優れた取組である。

#### 貢献の状況（水準）

取組は目的及び目標の達成におおむね貢献しているが、改善の余地もある。

### 2. 目的及び目標の達成状況

#### 特に優れた点及び改善点等

公開講座は、受講者数が定員に満たないテーマが若干見受けられるものの、受講修了者率や受講者に対して実施したアンケート調査では満足度が高く優れている。しかし、一部では、「専門的な内容で分からなかった」との回答もあり、改善の余地がある。

附属図書館は、毎年度一定の学外者の入館があり、成果を上げているが、一般市民の入館者数が1割にも満たない状況については、改善の余地もある。

「佐野家古文書」の展示会の入場者数は、平成11年度に対し、平成12年度は減少している点においては改善の余地もあるが、アンケート調査から入館者の満足度は高く、成果を上げている。

研究生は、毎年度200人前後の受入れがあり、成果を

上げている。

#### 達成の状況（水準）

目的及び目標がある程度達成されているが、改善の必要がある。

### 3. 改善のためのシステム

#### 特に優れた点及び改善点等

公開講座や医学史資料の展示においては、受講者等にアンケート調査を行い、意見や問題点等を把握し、改善に結びつけている点は優れているが、取組全般においては、受講者等以外の幅広い社会のニーズが把握されておらず、この点において改善の余地もある。

各活動について、自己点検・評価は行っているが、外部評価は行われておらず、改善の余地もある。

#### 機能の状況（水準）

改善のためのシステムがある程度機能しているが、改善の必要がある。

## 意見の申立て及びその対応

当機構は、評価結果を確定するに当たり、あらかじめ当該機関に対して評価結果を示し、その内容が既に提出されている自己評価書及び根拠資料並びにヒアリングにおける意見の範囲内で、事実関係から正確性を欠くなどの意見がある場合に意見の申立てを行うよう求めた。機構では、意見の申立てがあったものに対し、その対応について大学評価委員会等において審議を行い、必要に応じて評価結果を修正の上、最終的な評価結果を確定した。

ここでは、当該機関からの申立ての内容とそれへの対応を示している。

申立ての内容	申立てへの対応
<p>【評価項目】 改善のためのシステム</p> <p>【評価結果】 外部からの意見を取り入れるための取組として、<u>外部評価などが行われておらず、改善の余地もある。</u></p> <p>【意見】 改善の余地も求められているが、評価結果については尊重し対応していくことにする。          なお、評価結果と 評価の概要の3.改善のためのシステムの特に優れた点及び改善点等で「外部評価などが行われておらず、改善の余地もある。」点について、本学では平成14年2月12日(火)と20日(水)に大学運営等、教育、研究、医療について、大分医科大学自己点検評価2001年により、外部評価を実施した。          外部評価の取り組みを早めることから、本来は2002年に取りまとめる予定であった自己点検評価を、1年前倒しで取りまとめた。</p> <p>【理由】 外部評価を13年度に行った。</p>	<p>【対応】 原文のままとした。</p> <p>【理由】 左記「意見」で述べられている外部評価は、評価結果に対する意見の申立ての照会をした後の取組である。</p>